

〔研究会例会報告要旨〕

1994年度第2回研究会

日時 10月14日（金） 15:00～19:00

報告は以下の順序で行なわれた。

「世紀転換期スウェーデン労働運動における
日常生活—ドイツとの比較を念頭に—」

報告者 石原俊時

〔報告要旨〕

労働者階級の形成は、自己が他の諸社会階級と異なるという意識を持つことともに、自分たち労働者間に何らかの独自の社会関係やそれを基盤とした文化（労働者文化）を作り出すことをともなっていたと思われる。そこで、本報告では、世紀転換期の労働運動における日常生活（団体生活）に焦点をあて、労働者が互いに如何なる社会関係を取り結んでいったのか、そしてそれがどのような性格を持っていたのかを検討した。

その際、注目したことは、スウェーデンの労働運動が、世紀転換期に、禁酒運動や自由教会運動と互いにメンバーを重複させながら密接な関係を持って展開し、それらの運動とともに「国民運動」の一つに数えられるようになったことである。即ち、スウェーデンの労働者階級は、そうした状況にも見られるように、中間層と様々な形で交流しつつ形成されたのであり、そのことが、スウェーデンの労働者階級や労働運動の性格を大きく規定していったと考えられるのである。

検討の結果、労働運動の団体生活には、他の「国民運動」に起源を持つものが多く存在し、その活動の枠組もほぼ共通であったことがわかった。このことは、労働運動が、その活動を展開するのに当たり、その形態や枠組に関して、他の「国民運動」に大きな影響を受けたことを示していると思われる。また、労働運動は、その団体生活によって、メンバーの日常生活を包括的に統合していたのみなら

ず、そうした生活全体を通じて「リスペクタブル」な労働者を養成しようとしていた。このことは、労働運動の団体生活の発達、他の「国民運動」との関わりを媒介として、スウェーデンにおける禁欲的プロテスタンティズムの展開を背景に持っていたことを示唆している。さらに、スウェーデンの労働運動の団体生活における公共的な空間は、ドイツの労働運動のそれと異なり、開放的な性格を持っていたことが明らかとなった。それは、他の「国民運動」との密接な関係に代表されるような、労働者階級と中間層の様々な形での交流によって生じてきたものと思われる。このような交流を通じて、様々な出自を持った労働者は、スウェーデンの近代化・工業化がもたらした社会の激変に積極的に対応しつつ、市民文化を受容し、独自の自己の文化を形成していったのである。それが、「リスペクタブル」な労働者が担った労働者文化であったと思われる。そしてこのような公共的な空間の開放性は、労働者が、自己が「議論する公衆」として社会に認知されることを積極的に求め、労働者が他の「国民運動」とともに、スウェーデンの民主化を推し進めていったことの前提となったと考えられるのである。

このように、スウェーデンの労働運動の団体生活のあり方は、労働運動と他の「国民運動」が密接な関係を持って展開したように、中間層との様々な形での交流によって大きく規定されていた。また、労働運動の団体生活のこうした性格は、スウェーデンの社会民主党が早期に国民政党史化し、戦間期には、福祉国家建設を担っていったことと無関係ではないと思われる。今後さらに検討してゆきたい。（なお本報告は、前号に掲載した拙稿に基づいている。詳細はそちらを参照していただきたい。）